使節団をもてなす

琉球王国は、すべての来訪者に対する厚遇を誇りにしていました。首里城の側門には、「守礼之邦」とさえ書かれています。中国や日本からの使節やその他の来訪者は、上質な食べ物と泡盛でもてなされ、この饗宴は何週間も続くこともありました。

1853年には、徳川幕府に鎖国を解いてアメリカと貿易を行うよう迫るために日本に向かっていたマシュー・C・ペリー提督（1794–1858）が、琉球王国に寄港しました。琉球王は当初、アメリカ人の一行を首里城に入れることに躊躇していましたが、最終的には入城に応じ、琉球らしいおもてなしの心で一行を迎え入れました。ペリー提督の訪日の記録を残すため同伴していたベイヤード・テイラーは、「熟成されていてまるやか…どこかフランスのリキュールのように」（恐らくはブランデーのこと）な飲み物に感動しました。テイラーにふるまわれたのはおそらく熟成泡盛だったのでしょう。

しかし、この時の記録によると、アメリカからの一行に提供された食事は、中国と日本からの客人にふるまわれるものに比べるといくらか見劣りしたようです。何といても、琉球王国は中国と日本とは何世紀にもわたって関係を築いてきたのですから仕方のないことです。テイラーと非常に感心させた泡盛でさえ、琉球王国の最高級泡盛には到底届かないものであったのかもしれない。